

まずはP W Dの職員の中から、15人ほどのチームを3つ編成した。日本人専門家とチームを組み、3地区で無収水対策に取り組むためだ。「彼らの中には、無収水」という言葉すら知らない人もいました」。そう話すのは、チームの一員として活動した日水コンの小林伸吉さん。まずは無収水率とは何か、その改善のために何をすべきかを

地道な作業が 漏水をなくす秘訣

ここで日本は2007年より、浄水場や配水管の整備などに協力してきた。しかし、ある深刻な問題があった。「配水管に穴が開いたり、継ぎ目から水が漏れたりしているんです。給配水施設の維持管理が不十分でした」。株式会社日水コンの間宮健匡執行役員はそう話す。この影響が及んでいるのが、50%という無収水率の高さだ。無収水率とは、浄水場でつくられた水のうち、漏水や、水道メーターの故障などが原因で、料金請求がでない水の割合のこと。日本は、全国平均10%未満と世界的に見ても極めて低い無収水率を誇る。そのノウハウを生かして、ゴア州の全てのの人に水を届けたい。2011年、ゴア州公共事業局(P W D)を対象に日本の技術協力が始まった。



どう無収水率を下げていくのか、PWDの職員たちと対策を話し合う間宮さん(中央)

説明することから始めなければならなかった。続いて取り掛かったのは、各家庭の水の使用状況の把握だ。一軒一軒訪問し、庭にある水道メーターを確認し、その地区のどこに配水管が通っているのかも全て調べ、一枚の地図にした。これまでは配水管の本数、位置情報を網羅できていなかったからだ。それが分かれれば、次はどこで漏水しているのか調査を開始。音聴棒と呼ばれる棒を地面に埋まった配水管に当てて、振動から音を拾う。シー、スーなど、サ行の音がしたら漏水の疑いがあるというサイン。P W Dの職員たちにとって初めて扱う機器のため、日本人専門家が付き添って根気強く使い方を教えた。

「ほら、この音を聞いてみてください」。漏水の音が聞こえたら、P W Dの職員に聞いて覚えてもらう。そうすれば今度は彼ら自身で、漏水を発見できるようになる。1カ所が終われば、また別の位置で耳をそばだてる。配水管は無数にある。来る日も来る日も、地道な作業を続けた。P W Dのワチャ・スンダーさんは、「日本人は仕事を几帳面にこなす。技術の高さもさることながら、仕事に対する姿勢を学びました」と振り返る。徐々に漏水を見つける機器の使い方慣れたP W Dの職員たち。「ほら、この漏水は俺が見つけたんだぜ」と自慢し合うようになった。漏水さえ見つけられれば、後は修理するだけだ。2年間、みっちり鍛えられた3チームの努力により、対象の3地区では、無収水率が平均して20%以上上がった。「これに満足せず、さらに他の地区で対策を始めた職員もいます」と小林さんはうれしそうに話す。「給水時間が延びた」「水の出が良くなった」。住民たちからは、そんな声が聞かれるようになった。

P W Dの職員全員に無収水対策の術が身に付けば、彼らの夢の実現も不可能ではない。それは「24時間給水」。インドのどの州でも達成されていない目標に向けて、大きな一歩を踏み出している。



ゴア州PWDの職員は、漏水対策に取り組む他の州の職員にも、自分たちが学んだ技術を伝えている

地中の配水管に音聴棒を当て、漏水がないか調べるPWDの職員と日本人専門家



あちこちで 水が漏れている

インド西部に位置するゴア州。住宅街を歩いていると、どの家の庭にも高さ1メートルほどの大きなタンクが置かれているのが目につく。一体これは、何のためにあるのだろうか。この辺りでは、蛇口をひねればいつでも水が出るわけではない。1日2、3時間だけという地域もある。

ある。住民たちは、水が出るうちにタンクにため、もしもの時のために備えているのだ。人口約145万人、インドの中で最も小さい州。ポルトガルの植民地時代に建てられた聖堂や修道院から成る世界遺産、インド洋に面した美しいビーチは有名だ。近年は観光開発が進み、年間200万人が訪れる一大観光地となったが、その発展により増えた水の需要に供給が追いついていない。そ



各家庭には水道メーターがあるものの、故障で水道料金を計算できないことも多い



インド
from **INDIA**

水が無駄なく届けたい

インドで最も小さい州、西部のゴア州では、日々の生活に必要な水が足りていない。そこで日本とインドの技術者たちは、この地域の無収水対策に乗り出した。



配水管の継ぎ目から水が漏れている。放っておけば貴重な水が無駄になってしまう